令和４年度

帝塚山学院泉ヶ丘高等学校
入学者選抜試験問題

高校入試

国語

（試験時間 60 分）

受験番号	

一　次の文章は天沢夏月の『17歳のラリー』の一節である。テニス部に所属する高校生の「徹（俺）」は、チームの絶対的エースの「川木」とペアを組んで公式戦に出場し、東京大会でベスト24まで勝ち進んだ。しかし、「徹」はベスト24まで勝ち進んだのは「川木」の実力だけによるものと考え、これまでまじめに練習にとりくんでいたことがばからしくなり、毎日続けていた朝練を初めて休んだ。以下はそれに続く場面である。よく読んで後の問いに答えなさい。

うちは昼練は禁止だ。コートは解放されているので出入りはできるが、打っていると職員室から丸見えなのですぐに怒られる。校庭でサッカーをしていても許されるのにそれはおかしい、と山本が顧問の北沢先生に訴えたことがあったが、そもそも顧問自体を面倒がっている北沢をして暖簾に腕押しだった（仮に昼休み中に怪我をされたりすると面倒らしいとかなんとか）。だから昼休みのテニスコートは、基本的にがらんとしている。

そのテニスコートで川木を見かけた、というのは日々乃に聞いた。

「なんか一人でうろうろしてたよ。最初不審者かと思った」

フェンスの防風ネット越しにコートを覗き込むと、確かに川木がうろうろしている。㊟1ベースライン付近で、何かを確かめるように指を差したり、歩幅をはかったりしている。

「なにしてんだよ」

思わず声をかけると、肩をびくつかせて川木が振り返った。

「なんだ、徹か」

それから急に顔をしかめ、

「なんで今日朝練来ないんだよー」

「朝練は自由参加だろ」

「徹は皆勤賞だろ」

「休みたいときだってあるさ」

「休むんなら言えよ」
「だから、自由参加だって」
「徹が休むとか思わねーだろ、普通。おかげで無駄に早く来ちゃったじゃん」
「㊟2サーブ練したんだろ？」
「俺が練習したかったのはサーブじゃねえの！　㊟3雁行陣(がんこうじん)で㊟4ストレートになったときのパターン練習したかったのに」
確かに俺も川木も㊟5クロスラリーが得意なので、ストレートラリーになったときの展開は少しまごついているかもしれない。それならそうと言えばいいのに。川木の方こそ、来るんなら言えという感じ……そこまで考えて、ふと思う。言われていたら、俺は果たして今日、朝練に来たのだろうか。
「……で、今はなにしてるんだ」
もう一度訊(き)くと、川木は「イメトレ」と短く答えた。イメトレ。高校テニスレベルでイメージトレーニングなんか効果があるのかと思ってしまうが、①川木ほどの選手にはきっと重要なことなんだろう。
「こないだのダブルスはあまりよくなかった。ワリィ」
俺は目を剥(む)いた。
「川木が謝ることじゃない」
「いや、俺の立ち回りがよくなかった」
「川木はよかったよ。サーブとか、すげえ決まってたし……」
「全然。㊟6サービスエースなんかどうでもいい」
サービスエースなんかどうでもいい。その言葉を本心から口にできるやつが、どれほど少ないか。
「……なにが気に入らなかったんだよ」
やや険のある口調になったが、川木は気づかなかったようだった。
「あんまりカバーとかできてなかった」
俺は苛立(いらだ)った。それはそもそも、俺が川木にカバーさせるようなことをしていたから。

「俺が悪いやつだろ、それ」
「いや、徹は②いつも通りだったよ」
川木は平然と言った。その瞬間、俺の中で何かが壊れた。
「いつも通りってなんだ。いつも通り足手まといだったか？」
気がつくとそんな言葉が口を飛び出していた。言ってしまってから、「言ってしまった」と思ったがもう手遅れだ。
でも、川木は思ったほどには表情を変えなかった。それにますます苛立って、口が勝手に動いてしまう。
「こないだの試合だって、それまでの試合だって、ポイント多く取るのはいつだって川木だろ。俺が取りこぼしたポイントも全部川木が拾ってくれるじゃないか。ベスト24に入れたのだって川木が強かったからだ。俺が何かしたわけじゃない」
川木が何かを言おうとしたので、機先を制してまくし立てた。
「ストレートのパターンだって、川木は前でも後ろでもちゃんとしてた。㊟7ポーチに出るタイミングが遅かったり、決めきれなかったり、ラリーに打ち負けて相手に㊟8チャンボあげてるのは俺だ。俺が悪いんだよ。いつもそうだ。いつもそうなんだよ。ずっと思ってたさ。川木は強すぎるんだ。俺なんかと組んだところで実力差がありすぎて、俺の方ばっか狙われて足引っ張るんだよ。勝てば川木のおかげだと思うし、負けたら俺のせいだと思うんだ。ずっとそうだった。はっきり言って俺はダブルス嫌いだったし、川木と組むのも苦痛だった。自分が惨めでしんどいんだよ！」
最後の言葉を吐き出すとき、俺は下を向いていた。別にいい。③今は試合中じゃない。前を見る必要なんてないんだ。
「④……団体戦は、ダブルスやめようぜ。俺から山本に話す」
俺はぽつりとつぶやいた。
沈黙が降りると、昼休みの喧噪（けんそう）がうっすらと校舎の窓や、校庭の方から聞こえてくる。テニスコートは校舎を挟んで校庭の反対側にあるので、昼休みにこっちの方にくる人は少なくて、なんだか別世界のように感じる。コートの上に、俺と川木だけ。だけど、俺は一人だ。ここには俺しかいない。川木は別次元の存在だ。同じコートの上に立っていても、川木は俺と同じ土俵でテニスをしていたことなんて、一度だってないのだ。
でも、どうせあと数ヶ月待てば川木はいなくなる。今揉（も）める必要なんてなかったのに、言ってしまった自分にちくちくと

後悔が込み上げてきたとき、
「嫌だ」
川木の声は小さかったが、やけに大きくコートに響いて、俺は顔を上げた。川木の真顔がそこにあった。テニスをしているときだけに見せる、ぎらぎらとした夏の日差しのようなまなざし。
「話聞いてたのか？」
「聞いてたけど納得はしてねえ」
「納得なんか求めてねえよ。どうせ川木にはわからない」
「俺は⑤勝ったとき徹のおかげだと思うし、負けたら自分のせいだと思ってる」
⑥俺は言葉を失いかけた。かろうじて言い返した。
「真似すんな」
「マジなんだな、これが」
いつぞや聞いた口調で川木は笑う。なぜ笑うのだろう。⑦俺は今度こそ言葉を失う。
「なあ徹。俺はおまえが思ってくれてるほどすげえ選手じゃねえよ」
コートの隅っこに落ちているボールを見つけて、川木が小走りに拾いにいく。拾ったボールをくるくると手の中で転がしてから俺に向かって投げる。俺がひょいと避けると「避けんなよッ」と怒鳴る。
「すぐ調子崩すし、調子崩れたら戻らねーし、朝練は気分乗らなきゃ出ねーし、ラリー長くなるとついつい一発エースに頼っちまうし、でもミスるし」
言いながら川木は、俺が避けたボールを拾いにいった。一人で「取ってこい」をやっている犬みたいだ。
「それでも川木は、注9インハイに出てる。それだけの力がある。注10海外にだって呼ばれてる。それだけ認められてるってことだろ。誰でもいいわけじゃない。それは、川木じゃなきゃダメってことだろ」
俺は淡々と事実を述べる。⑧川木がもう一度ボールを投げる。俺は避ける。
「この世界には、調子崩さないし、調子崩しても自力で戻せるし、朝練は毎日出るし、ラリー長くなっても根気強くチャン

ス待つし、決め所はきちんとエース決めるようなやつが、いるんだよ」
川木が言いながら、またボールを拾いにいった。なにをしているんだ、こいつは。
「そんな化け物みたいなやつ、いねえよ」
俺が言うと、川木は笑った。
「おまえのことだよ、徹」
ぽーん、とボールが放られて、無意識に手を伸ばしていたようだった。ぽすっと手の中に収まったボールを見て、川木を見た。
「……は？」
「だから、徹のことだって」
もう一度言って、川木は空を見上げた。ついこないだまで桜の花びらが舞っていたはずの空は、一層青さを増して、初夏の気配を漂わせている。風が吹いて、鼻孔をくすぐる。薬を飲んだはずの鼻がむずがゆい。くしゃみを一つした。川木が笑った。
「一年の頃からずっと、すげーなあって思ってた。入部した最初の頃ってさ、一年は全然打たせてもらえなくて外周とかめっちゃ走らされるじゃん。追い越し走とか俺すげえキツくってさ」
追い越し走というのは、部員が一列になって一定の速度で走りながら、一番後ろの人が列の一番先頭まで走って先頭者になる、というのを延々繰り返すランニングだ。ただ走り続けるのと比べて加減速を繰り返すので負担が大きく、体力のないやつはそのうち追い越せなくなって列から脱落していく。
「翼がスタミナ馬鹿だろ。あいつが先頭になるとなんかペース上がって追い越すのほんとしんどいんだよ。絶対嫌がらせしてんだぜ」
確かに山本は強かった。追い越し走で脱落したことがないのは山本と、それから、
「でも徹だけは、いつも山本に食らいついていってたからな」
……そう。最後にはいつも、俺と山本が二人で追い越し走するという地獄絵図になっていたっけ。

「最初はなんか弱っちそうだなと思ってた。でも徹は朝練は絶対毎日最初に出てるし、練習中もすげえ真面目だし、冷静だし、どんどん上手くなるし、プレーは丁寧でミスもないし、決め所は絶対ミスんねえし」

俺はだんだん居心地が悪くなってきて、遮ろうと思った。でもそのとき、川木が言ったのだ。

「なにより徹は、下を見ないから」

――下を見るな。

コーチに言われた言葉。自分の中に刻まれている信念。誰にも気づかれていないと思っていた。ましてや自分のことなんか、まるで眼中にないだろうと思っていた川木なんかに。ずっと見ていたのだろうか。俺が川木の背中を見続けたように。その背中は振り返らないと思っていた。俺のことなんか見ていないのだと思っていた。同じ場所にはいないのだと思っていた。

――でも。

「おまえが前見てるから、俺も下見ないようにしようって思うんだぜ。おまえが背中見てるって思うと、なんか背筋が伸びるんだ。だからダブルスの方が安定してるんだよ。おまえが同じコートにいるだけで、すげえ助けられてるんだ」

「そんな精神論……」

苦し紛れの反論は、自分でも無意味だとわかっていた。なぜなら、

「テニスはメンタルスポーツだからな」

川木はにやっと笑う。

そうだ。そしてダブルスにおいて選手の精神は、二つで一つだ。当たり前のようで、わかっていなかったこと。

「ダブルスパートナー、誰だってよかったわけじゃねえよ」

ぼそりと、川木はそう言って、遠くを見る目になった。

「なあ徹、おまえはずっと前見ててくれよ。俺がアメリカ行っても、どこにいても、俺の背中ちゃんと見ててくれよ」

その目に何が映っているのか、その日、俺はようやく少しだけわかったような気がする。

（天沢夏月『17歳のラリー』）

注1　ベースライン……テニスコートに引かれた線のひとつ。ネットから最も遠いところに引かれ、ここでサーブを打つ。
注2　サーブ……テニスのプレーを開始するときの打ち方、サービス。自分が投げ上げたボールを相手のコートに打つ。
注3　雁行陣……テニスの試合におけるダブルス（二人対二人の試合）のときの作戦のひとつ。
注4　ストレート……自分の正面に向かって球を打ち返すこと。ストレートラリーの略。
注5　クロスラリー……自分の斜めに向かってボールを打ち返すこと。
注6　サービスエース……相手が打ち返せない球で得点を決めることをエースという。ここではサーブによるエース。
注7　ポーチ……テニスのプレーのひとつ。ダブルスで自分の仲間に向かって放たれた球を横取りして打ち返すこと。
注8　チャンボ……チャンスボールの略。得点のチャンスになるような、打ち返しやすい球のこと。
注9　インハイ……高校スポーツの全国大会である「全国高等学校総合体育大会」の通称、インターハイの略。
注10　海外にだって呼ばれてる……「川木」はプロのテニス選手を目指し、アメリカへの留学を決めている。

(一)　――①「川木ほどの選手にはきっと重要なことなんだろう」とあるが、ここからわかる「徹」の心情として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア　高校生の技術レベルをはるかに超えている「川木」の実力は認めているのと同時に、「川木」の行動に対してどこか皮肉めいた気持ちもあわせもち、素直に感心できないでいる。

イ　高校生の技術レベルをはるかに超えている「川木」を心から尊敬しているものの、普段から親密な関係性であるだけに素直になれず、わざと冗談めいた態度をとっている。

ウ　高校生の技術レベルをはるかに超えている「川木」の実績は否定できないものの、いつも口先だけで中身が伴わない「川木」の行動については批判の気持ちを抱いている。

エ　高校生の技術レベルをはるかに超えている「川木」の行動に対して、自分の小さな価値観で短絡的に評価していたことについて反省しなければならないと自責している。

(二) ―― ②「いつも通りだった」とあるが、ここで「川木」は「徹」のプレーについてどういうことを伝えたかったと考えられるか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア　あせりを感じることなく、カバーの必要性を最低限に抑え込んでいたということ。
イ　集中力を切らすことなく、実力差を感じさせないプレーをしていたということ。
ウ　陣形を見失うことなく、カバーのしやすい位置でプレーしていたということ。
エ　調子を崩すことなく、最後まで根気強く冷静なプレーをしていたということ。

(三) ―― ③「今は試合中じゃない」とあるが、このときの「徹」の心情として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア　普段の言動と矛盾する自分の行動に嫌悪感を覚え、そんな自分を厳しく戒めようとしている。
イ　普段の自分を縛り付けていた発想を転換させることで、新たな生き方に進むことを決意している。
ウ　普段の信条と異なる自分の行為に対して言い訳をすることで、自分を正当化しようとしている。
エ　普段と異なる現状を自分なりに分析し、「川木」に対する怒りを何とかごまかそうとしている。

(四) ―― ④「……団体戦は、ダブルスやめようぜ」とあるが、以下に示すのは、「徹」が「川木」とダブルスを組むのをやめようと考えた理由についての説明文である。［Ⅰ］～［Ⅲ］に入る適当なことばを、指定された字数に従って「徹」の発言の中から抜き出して答えなさい。

「徹」は「川木」といっしょにプレーするたびに、いつも自分が［Ⅰ（5字）］になっていると考えていた。ベスト24に入れたのも「川木」のおかげであり、自分が貢献できたとは思えなかったのである。実際、「川木」と「徹」の間には実力差があるために、いつも自分ばかり狙われて足を引っ張ることになり、［Ⅱ（8字）］だと思わざるをえず、その結果、［Ⅲ（6字）］あると感じて精神的な負担を抱えてしまうことになるため、ダブルスをやめたいと思ったのである。

(五) ―― ⑤「勝ったとき徹のおかげだと思う」とあるが、「川木」がこのように考える理由について、本文中のことばを用いて四十字以内で説明しなさい。ただし、句読点も一字と数える。

(六) ――⑥「俺は言葉を失いかけた」、――⑦「俺は今度こそ言葉を失う」とあるが、――⑥から――⑦に至る「徹」の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア　予期していなかった「川木」の告白に、真意を測りかねて動揺したが、「川木」がこだわりなく笑う様子を見て、そのさっぱりとした態度に戸惑いながらも心を動かされている。

イ　強引にこちらを真似してみせる「川木」の言葉遣いに不愉快になったが、「川木」の試合に対する一生懸命さは伝わってくるので、最後まで意見を聞いてみようと思っている。

ウ　思いがけない「川木」のことばに接し、それをどう受け止めればいいのか即座には判断できずに迷っていたが、どうやら「川木」は本気らしいとわかり、ひどく困惑している。

エ　突然「川木」が機嫌をとるようなことを言うので腹立たしく思ったが、「川木」の口調には実は思いやりがこめられていることに気づき、ひととおり話だけは聞こうと思っている。

(七) ――⑧「川木がもう一度ボールを投げる。俺は避ける」とあるが、この行動に表れている二人の様子の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア　「徹」を高く評価していることを伝えようとする「川木」と、「川木」からの評価に対して動揺し、とぼけてごまかそうとしている「徹」。

イ　自分にとって「徹」が必要だと訴えている「川木」と、その真意をつかみとれず、「川木」の発言を真に受けようとしない「徹」。

ウ　「徹」に自分の弱みをさらけだそうとする「川木」と、その態度が気に入らず、「川木」に対して無視を決め込もうとしている「徹」。

エ　意図せずして「徹」に自慢をしてしまう「川木」と、その高慢さを的確に見抜き、今後の「川木」の言動に警戒を強めている「徹」。

(八) この文章の表現の特徴として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 「徹」と「川木」の二人が話し合う場面の途中に回想の場面をさしはさむことで、読者は「徹」と「川木」が友情を深めていった経緯について、間接的にうかがい知ることができる。

イ 「徹」の心情に即して物語が展開されることで、読者は「徹」と一体感を持つことができ、次第に変化する「川木」に対する印象の変化について、現実感を持って味わうことができる。

ウ 「徹」と「川木」の二人の間だけで通じ合う略語を使いながら会話を進めることで、読者も二人の会話に参加しているような一体感を感じることができ、物語にリアリティが生まれている。

エ 「徹」の視点に立って物語が展開されているが、その中でときおりはさみこまれる風景描写を通じて、読者はそのつど「徹」の存在を客観的なものとしてとらえなおすことができる。

二　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

すべてを疑う。ほんとうにすべてを疑ってみる。そんなことしたら、どうなるだろう。

椅子に腰かける前にそれがこわれかけてやしないか疑う。それで、腰かける前にちょっと叩いてみたりする。でも、いまのがとどめの一撃になったかもしれない。叩く前はなんとか腰かけられたのに、叩いちゃったから、もうダメかもしれない。もいっかい叩いてみる。まだ、へいきだ。でも、……。石橋を叩いて渡る。だけど渡らずに叩きつづけている。叩きつづけてこわしちゃったりする。

[1]、目覚まし時計をかけて寝るとき、ふつうぼくらは目覚まし時計を信頼している。でも、あるとき目覚まし時計に異常に過剰に不信をもったとしよう。安心して眠れない。そこで、試しにちょっと先にあわせて鳴らしてみる。これはうまくいった。[2]、ほんとにまたちゃんと鳴るだろうか。また試してみる。うまくいった。だけど……。繰り返しているうちに夜が明ける。

少し話題を変えて、哲学的な懐疑の話をしてみよう。

よく「新しい発想は常識を疑うところから生まれる」とかなんとか言われるけど、その「疑う」ってことの話だ。

でも、こんなのはまだかわいい方だ。話は哲学だから、もっと①徹底的に過激に疑う。いまぼくはめざめて部屋の中にいるけど、ほんとうにそうなのか。いったいぼくは、めざめているのか、眠っているのか。これはもしかしたら夢なんじゃないか。だとしたらこの部屋も、この机も、このぼくの体も、夢まぼろしのたぐいなんじゃないか。

ぼくは昨日のことをはっきり覚えている。昨日は歩いてる途中で雨が降ってきて、傘をもってなかったから、いやだった。

でも、ほんとうにそんなことがあったのだろうか。ぼくの記憶ちがいじゃないのか。だれかしょうもない科学者がいて、ぼくにそんな記憶のまがいものを植えつけるイタズラをしたんじゃないのか？

こんなふうに言われると、バカげてると思いながらも、どう言い返してやればいいのかわかんなくて、ちょっとイライラする。でもね、実はぜんぶをいっぺんに疑うなんて、できることじゃないんだ。

[3]、いまぼくのサイフの中に入っているお札はニセ札かもしれない。そういう可能性はある。だけど、想像力をた

くましくしてほしい、ありとあらゆるお札がぜんぶニセ札かもしれないなんていう可能性はどうだろう。

そんなことはありえない。

そうきっぱり言える。そこんところをわかってほしい。

だって、ニセ札っていうのは本物があるからこそ言えることでしょう。本物のお札がないのにニセ札だけあるっていうのは、それは無理だ。【A】

次のことばをじっくり味わってみよう。

②「(注)1マチスの絵はぜんぶ贋作(がんさく)でした」

文字どおり、ぜんぶ。ぜんぶが贋作。ありえないよね。【B】

おんなじことが夢にも言える。夢だったのかもしれないって、ある一夜のことを考えるってのはありだけど、生まれてから死ぬまでのぜんぶが夢かもしれないって考えることはできない。それはもう常識的にできないっていうんじゃなくて、論理的にできない。夢はめざめている現実があってはじめて夢と言える。めざめない夢はもう、夢じゃない。【C】

③疑いは局地的なものでしかありえないってこと。

ニセ札かもしれないって疑うためには本物のお札がなくちゃだめだし、夢かもしれないって疑うにはめざめているときがなければいけない。疑うためには、疑いの足場が必要になる。何かを疑うためには、疑いをまぬかれているところがなくちゃ、だめなんだ。

疑うこともまた、なんらかの枠組に導かれている。すべての枠組をとっぱらって、ぜんぶをいっぺんに懐疑の淵(ふち)に沈めようったって、そんなことできはしない。【D】

えっ？　ぼくの言ったことは矛盾してないかって？

もし矛盾して聞こえたのなら、もう一度さっきぼくが書いたことを慎重に読みなおしてほしい。

どんなお札もニセ札じゃないかと疑うことはできる。

でも、すべてのお札をぜんぶいっぺんにニセ札かと疑うことはできない。

ここには〃any〃と〃all〃の違いがある。ふつうは〃any〃で言えるなら〃all〃でも言える。「どれでもいいから任意の

カモノハシを調べてごらん。そいつにはきっと水かきがついている。」そう言われたら、それはつまり「すべてのカモノハシには水かきがある」ってことだ。この場合は〝any〟(どれでも)から〝all〟(すべて)へとすんなり言い換えられる。

だけど、ニセ札や夢なんかの場合にはそうじゃない。〝any〟で言えたとしても、それを〝all〟にもってっちゃうと、アウトだ。

だから、逆に言えば、④すべてをいっきょに疑うことはできなくても、ひとつひとつならどんなものでも疑える。それはつまり、疑いの足場を確保しながら、その足場を変えていくということだ。疑いのステップを変える。これだ。

常識の話と合流しよう。

疑うことも含めて、何かをしようと思ったら、きちんと足をおろして、足場を確保しなくちゃいけない。常識はそのためにいちばんふつうに使われる足場になる。

だけど、ときには自分の立っているそこを疑わなくちゃいけないこともある。

でも、それは何もない真空地帯に飛び上がることじゃない。右足で立って左足のところを点検する。そして左足で立って右足のところを点検する。両足いっぺんに上げたら、ころぶのがおちだ。

常識を疑うということは、だから、常識を投げ捨てるということではない。かならずなんらかの常識を踏まえていないと、論理の神様よろしく身動きとれなくなってしまう。常識を踏まえつつ、自分の立っているそこを絶対視しないこと。

ひとつの足場から眺めわたしたら、こんどは別の足場を見つけて、そこからさっき自分が立っていたところを問題にする。つねに足場を確かめながら、ステップを変えていく。

そんな身軽さ。

現実ベッタリでもなく、論理の神様のようでもない。そんな人間のハンパさ。「ハンパ」って言っちゃあ身も蓋もないけど、言い方を変えれば、⑤融通無碍(ゆうずうむげ)に足場を変えていく身軽さということになる。

考えるってことは、そんなふうに軽やかに踊ってみせることだ。

(野矢茂樹(のやしげき)『はじめて考えるときのように』)

㊟1　マチス……フランスの画家。二十世紀を代表する芸術家の一人。

(一) 本文には次の一文が抜けている。【A】～【D】のどこに入れるとよいか。最も適当な場所を選び、記号を○で囲みなさい。

だけど、どんなものでも疑うことはできる。

(二) [1] ～ [3] に入ることばとして最も適当なものを次から選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。ただし同じ記号は二度用いないこと。

ア だけど　イ ただし　ウ たとえば　エ あるいは

(三) ―― ①「徹底的に過激に疑う」とあるが、そうすることに対して筆者はどう考えているか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア そもそもそのような行為は人間に許されない、神に属するものである。
イ そのような行為こそ常識を突破し、新しい発想をもたらすものである。
ウ そもそもそのような行為は哲学的でなく、常識に囚われたものである。
エ そのような行為は原理的に実行不可能で、誰もなしえないことである。

(四) ―― ②『マチスの絵はぜんぶ贋作でした』／文字どおり、ぜんぶ。ぜんぶが贋作。ありえないよね」とあるが、それはなぜか。ここより前の内容をふまえて四十字以内で説明しなさい。ただし、句読点も一字と数える。

(五) ―― ③「疑いは局地的なものでしかありえない」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア われわれが抱いた疑問がすべて解けることはありえず、部分的に解けても常に未解決の問題が残るという意味。
イ われわれは何かを疑う時も何らかの枠組によっており、枠組のない所で全てを疑うことはできないという意味。
ウ われわれの疑うという能力は限られた場面でのみ有効なものであって、懐疑が最善の方法ではないという意味。
エ われわれが懐疑するには確固とした枠組が必要で、それがない以上われわれの懐疑には限界があるという意味。

(六) ―― ④「すべてをいっきょに疑うこと」とあるが、それをたとえを用いて表現している箇所を、ここより後から二十字以内で探し、最初と最後の四字を抜き出して答えなさい。

(七) ―― ⑤「融通無碍に足場を変えていく身軽さ」とあるが、それはどうすることか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。なお、「融通無碍」とは機転がきくさまを表すことばである。

ア　自分の拠(よ)って立つ常識が間違っている可能性を考慮し、それにこだわらずに何か別の常識的な視点から問題がないか確認する作業を続けていくということ。

イ　適切な枠組を用いた視点から物事を見ることができない時は、自己の枠組は踏まえつつも新たな別の枠組を作ることを恐れてはならないということ。

ウ　常識的な考え方も大切だが、思いがけない視点から新しい発想が生まれることもあるので、あまり常識にこだわらずに物事を眺めていくのがよいということ。

エ　自己の枠組にとらわれるあまり考察が進まなくなるのは好ましくないので、深く考えず現実にそぐうように直観的に物事を判断するのが大切だということ。

(八) 本文の表現の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア　本文全体にわたって平易な話しことばを使って書かれているが、その中でも「　」をつけた会話文はより論旨に密接に関わるもので、対話形式による哲学入門的な文章になっている。

イ　冒頭部で椅子についての平易な具体例を挙げるだけでなく、途中の要所要所でいくつもの具体例を提示することで、常識に反するように思われる結論に説得力をもたらそうとしている。

ウ　物事を疑うという哲学的な問題について、比較的短い文を重ねて、語りかけるような話しことばを用いて考察することで、読者もいっしょに考えていると感じられる工夫がなされている。

エ　ほとんど具体例を挙げることなく物事を疑うという行為について論を展開し、なおかつ接続詞を多用することで結論部分に向けて読者が納得せざるを得ないような論理構成を行っている。

三　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

注1中昔、注2伊豆の国のある所の注3地頭の若く、狩りのついでに猿を捕りて、柱に縛り付けて置きたりけるを、母の尼公、慈悲ある人にて、あらいとほし。注4冠者ばら、足解き許して山へやれと言へども、①主を恐れて解くもの無かりければ、注5我と解き許して山へやりてけり。

これは春のことなりけるに、夏のころ、苺を柏の葉に包みて、注6人のひまに持ちて来てけり。②あまりにあはれにおぼえて、布の袋に大豆を入れて注7たびたりける。九月ばかりに、かの袋に栗を入れて持ちて来たりける時、あまりに不思議にも、いとほしくもおぼえて、捕らえて置きて、子どもを召して、かかる心ある次第語りて、「③これほどに恩を知る、心あるものなり。今より以後この後に、子々孫々まで猿殺し悩まさじと注8起請を書け。さらずは親子の儀あるべからず」と、起請書かせて、「注9当時までもかの所に猿殺すこと無し」と申し伝へたり。

されば恩を知らざる者は、注10畜類にも注11猶々あるべからざるものなり。

（『雑談集』）

注1　中昔……それほど遠くない昔のこと。
注2　伊豆の国……現在の静岡県の東部、伊豆半島のあたりの国名。
注3　地頭……荘園の土地管理や税の徴収などを行ったその土地の有力武士のこと。
注4　冠者ばら……若い召使いたち。
注5　我と……自分自身の手で。
注6　人のひまに……人のいない間に。
注7　たびたりける……お与えになった。
注8　起請……神仏などに誓いを立てて自分の決意を示す文書。
注9　当時……今現在のこと。
注10　畜類……鳥や動物、魚や虫など生き物の総称。
注11　猶々……やはり。

(一) 本文中には、「　　」の付いていない発言の部分が一箇所ある。その部分の最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

(二) ―― ①「主」と同じものを次から二つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 地頭　　イ 猿　　ウ 尼公　　エ 冠者ばら　　オ 子ども

(三) ―― ②「あまりにあはれにおぼえて」とあるが、「あはれに」感じたこととして適当でないものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 助けてもらったことへのお礼として、猿が苺の実をわざわざ柏の葉に包んで持ってきたこと。

イ 助けてくれたことを「主」に知られないよう気遣って、猿が人のいない時に苺を持ってきたこと。

ウ 助けてもらったのは春だったが、夏になっても猿が忘れることなくお礼に苺を持ってきたこと。

エ 助けてくれたことに対して、猿がふたたび捕まる危険もかえりみず苺を持ってきたこと。

(四) ―― ③「これほどに恩を知る、心あるもの」とあるが、「恩」を最初に感じたのはどういうことに対してか。次の形式に合うように答えなさい。ただし、句読点も一字と数える。

（　　二十五字以内　　）こと。

(五) この文章で、筆者が読者に伝えようとしているのはどのようなことか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 親のことばに従い、親孝行をしなくてはいけないということ。

イ 命あるものへの慈悲心を持たなくてはいけないということ。

ウ 他者から受けた恩を大事にしなくてはいけないということ。

エ 神仏への誓いを子孫の代まで守らなくてはいけないということ。

(六) 本文の内容と合うものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 春に、一人の若い召使いが、狩りの途中で猿を捕らえて柱に縛り付けた。

イ 秋にも、尼公は人に見られないよう気をつけて猿に大豆を分けてあげた。

ウ 地頭は猿の行いに感動して、家来たちにも猿を殺さないよう誓わせた。

エ この出来事があった土地では、今も猿を殺すことがないと言われている。

四　次の(1)〜(6)の ―― を引いたカタカナを漢字に直しなさい。

(1)　この菌は従来の抗菌剤へのタイセイを持っている。
(2)　多くの民衆のギセイをはらって完成した宮殿。
(3)　わたしは小さな劇団をシュサイしています。
(4)　おそらくこの条件にガイトウする事例は無いだろう。
(5)　長期にわたったケイヤクがそろそろ切れるころだ。
(6)　このあたりの住宅は実にフゼイのあるたたずまいをしている。

五　次の(1)〜(4)の例文について、次のA・Bに答えなさい。

A　―― を引いた四字熟語の使い方が適切なものは解答欄の**正**を○で囲み、適切でないものは**誤**を○で囲みなさい。

B　それぞれの四字熟語の □ で囲った部分の読みをひらがなで書きなさい。

(1)　わたくしは地域の一層の発展と皆さまの幸福のために粉骨砕身、政治活動を行う所存です。
(2)　あの僧侶は人徳があって誰にも分け隔てせずに接する、唯我独尊を絵に描いたような人だ。
(3)　昨日安く手に入れた焼きものはとてもいいもので、まさに二束三文の値打ちがあると言えるよ。
(4)　取引先の信頼を裏切ってしまうような言語道断なふるまいは、すぐにやめないといけない。

六　次の(1)～(3)の各文の　――　を引いた部分の説明として最も適当なものを後のア～コから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。

(1)　a　その昔、あるところに一人の僧がおりました。
　　b　元気のあるうちに宿題を終わらせよう。

(2)　a　彼の表情はとても晴れやかだ。
　　b　いまにも雷が落ちそうだ。

(3)　a　その赤ん坊はぴたりと泣きやんだ。
　　b　うそをつくと汗が出てしまう。

ア　名詞　　イ　動詞　　ウ　形容詞　　エ　形容動詞　　オ　形容動詞の一部
カ　副詞の一部　　キ　連体詞　　ク　助詞　　ケ　助動詞　　コ　助動詞の一部

令和四年度

帝塚山学院泉ヶ丘高等学校
入学者選抜試験

国語（解答用紙）

受験番号

一

(一) アイウエ

(二) アイウエ

(三) アイウエ

(四) Ⅲ Ⅰ Ⅱ

(五)

(六) アイウエ

(七) アイウエ

(八) アイウエ

二

(一) A B C D

(二) 1 アイウエ 2 アイウエ 3 アイウエ

(三) アイウエ

(四)

(五) アイウエ

(六) 最初 最後

(七) アイウエ

(八) アイウエ

三

(一) 最初 最後

(二) アイウエオ

(三) アイウエ

(四)

(五) アイウエ

(六) アイウエ

四

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

五

(1) A 正誤 B

(2) A 正誤 B

(3) A 正誤 B

(4) A 正誤 B

六

(1) a アイウエオカキクケコ b アイウエオカキクケコ

(2) a アイウエオカキクケコ b アイウエオカキクケコ

(3) a アイウエオカキクケコ b アイウエオカキクケコ